

中上級日本語学習者の辞書使用

— 作文時の辞書使用の詳細調査と

文章表現のための辞書使用スキルアップを目指すワークショップ実践報告 —

鈴木智美・高野愛子

【キーワード】 辞書使用のスキル養成、プロセスの意識化、例文、複数辞書検索、
対訳辞書の相互検索

1. 研究の目的

本研究の目的は、日本語学習者の文章作成時における効果的な辞書使用を支援するために、学習者の作文過程における辞書使用状況の実際を情報としてまとめしていくこと、および学習者の文章表現に役立つよう、辞書使用のスキルアップを目指したワークショップを実践し、その内容を検討していくことである。

本稿では、実際に中上級レベルの6名の学習者の協力を得て、辞書使用についての詳細調査を行っている。調査を通じて観察されたいくつかの注意すべき点について述べるとともに、その結果を踏まえ行った辞書使用のスキルアップを目指したワークショップについて、1回目の実践を報告する。

2. 研究の背景

日本語教育においては、これまでも学習ツールである辞書の充実の必要性は指摘されてきた。しかし、日本語学習者が具体的に辞書をどのように「使う」のかに着目した研究は多くなく、学習者は辞書使用に関する体系的な教育・支援カリキュラムなどはないまま、それぞれの工夫によって辞書を使用しているのが現状であると思われる。

その中で、鈴木(2010)は、作文コーパスに基づき¹、学習者の辞書使用が一因となり引き起こされていると思われる作文中の不自然な表現を分析し、鈴木(2012a, 2012b)では、留学生を対象とした辞書使用についてのアンケートおよびインタビュー調査を行い、その詳細を報告している。鈴木(2013)では、さらに

¹ 「JLPTUFS 作文コーパス」(東京外国語大学留学生日本語教育センター)を使用している。

上述のアンケート調査における自由記述による回答内容の質的な分析を通じて、日本語学習者のための辞書使用のスキル養成のポイントを日本語のレベル別に抽出している。しかし、個々の学習者が実際に文章課題を行う際に、どのように辞書検索行動をとるのかを解明する余地はなお残されており、辞書使用のスキル養成についても、現場からの実践報告などは行われていない。

3. 辞書使用調査の手順

今回の調査では、6名の日本語学習者に、ふだん使用している辞書を使いながら作文課題を行ってもらった。調査は鈴木(2014)の手順を改善した上で、以下のように行われた²。

(1) 調査時期：2014年7月～8月(一人あたりの調査時間は1.5～2.5時間)

(2) 調査参加者：中上級レベルの日本語学習者6名³

(3) 調査方法：

①調査研究の目的⁴および方法を説明⁵

②同意書およびフェイスシート記入

③辞書を使用した作文課題を実施(辞書は各学習者が持参したもの)

・作文中の手もとを録画⁶

² この調査については、本稿の執筆者のうち鈴木が担当した。

³ 調査参加者は、いずれも東京外国語大学に在籍し日本語を学ぶ留学生である。日本語レベルは、東京外国語大学「全学日本語プログラム」中上級レベル(レベルコード：500)の受講終了を目安として、本稿の執筆者2名が個別に協力を依頼した。

⁴ 鈴木(2014)にも述べた通り、調査にあたっては、調査の目的が日本語学習者の文章表現における辞書使用の実際を調べることであるということ、またこの調査をもとに、日本語学習者の効果的な辞書使用について考えていきたいということを説明することとしている。

⁵ 一方的な協力を要請するということではなく、辞書使用について共に考えていきたいという立場で協力を依頼するよう心がけている。調査の目的等の説明に入る前には、調査参加者の夏休みの予定について雑談したり、作文終了からインタビューに入るまでの間にリラックスして休憩をとってもらうなど、なるべく緊張を和らげるように工夫を行った。また、調査参加者には、調査終了後に1点200～350円ほどの文房具類(ミニ便箋、和紙シール、クリアファイル、ノートなど)をいくつか組み合わせを選んでもらい、お礼として渡した。

⁶ カメラは三脚を使用し、調査参加者の左側から、作文用紙(B4版横長の原稿用紙)全体が収まるようセッティングした。調査参加者のうち2名は左手に、4名は右手に筆記用具を持ち、作文を執筆した。通常、電子辞書は作文用紙の上部側に置いて操作し、スマートフォンの場合は、作文用紙の周囲の適当な場所に置き、必要な場合に手にとって操作を行っていた。左手で筆記する調査参加者の場合も左側から録画することになったが、辞書使用箇所についてモニターするには特に支障はなかった。ただし、インタビュー

- ・調査参加者には、辞書を使用した箇所印をつけておいてもらう
- ・調査者は録画をモニターしながら⁷、辞書使用箇所をチェック

④辞書使用について、その詳細（使用目的、使用辞書、その結果）を確認するための事後インタビュー

以下の図1および図2に、調査における実際のモニター録画面の例を示す。



図1 電子辞書使用の場合



図2 スマートフォン使用の場合

作文課題は、複数提示した中からそれぞれの調査参加者に1つ選択してもらった。提示したテーマは以下の表1の通りである⁸。中上級レベルにふさわしい課題であること、およびその場で内容を考えて書けるものであることを念頭に、いづれも意見を述べるテーマを選んだ。字数は600字程度とし⁹、字数がわかりやすいよう原稿用紙（横書き）を使用した。時間は60分間を目安とし、終了した時点でその旨伝えてもらうことにした¹⁰。

の補助的な手段としてではなく、録画面をより詳細に調べる目的があるならば、筆記用具を持つ手とは反対側にカメラがセッティングできるよう、あらかじめ調整可能な方法をとったほうがよいかもしれない。

⁷ 録画状況をモニターしている旨を参加者に伝え、実際にカメラの画面を見てもらい、個人が特定できるような身体部分などは録画範囲ではないことを確認してもらった。調査者は、調査参加者の目には直接入らない、少し離れた位置で同時並行的にモニター画面を見て、辞書使用箇所を記録用紙にチェックしていった。

⁸ 課題①は『テーマ別中級から学ぶ日本語（改訂版）』第5課の「話しましょう」を参考にしたものである。課題②は本調査者の自作であるが、作文テーマとしては珍しいものではなく、類似の課題は市販の日本語教科書等にも見られるかもしれない。課題③は、教員同士で情報交換等しながら、授業で扱ったことのあるテーマであるが、明確に出典と言える書籍があるかについては、現時点で明らかではない。

⁹ ある程度まとまった分量の文章の中でどの程度辞書が使用されるかという点も見ため、600字の作文というタスクとした。

¹⁰ 多くの調査参加者は、単に作文を「書き終わった」時点ではなく、もう一度全体を読み返すなどした後に、作文が「完成」したと思った時点で、終了の合図をしていた。

表1 作文課題のテーマ

<p>①「いっしょに楽しく飲んだり食べたりすれば、人々は友達になれる」という意見があります。一方、「そんなことだけでは本当の友達になれない。友達になるためには、嫌なことやつらいことなどをいっしょにやってみるなど、もっと大切なことがある」という意見があります。あなたはどちらの意見に賛成ですか。具体的な例を挙げながら、あなたの考えを述べてください。</p>
<p>②外国語を勉強する時、学校へ行って習った方がいいという意見と、自分でインターネットを利用したりして勉強できるから、学校へ行って習わなくてもいいという意見があります。あなたはどう思いますか。具体的な例を挙げながら、あなたの考えを述べてください。</p>
<p>③若い時に、外国で1年間暮らす機会(=chance)が与えられたとします。できるだけ多くの国を訪れる方がいいか、1つの国・地域にずっと滞在した方がいいか、あなたはどちらがいいと思いますか。理由を挙げながら、あなたの考えを述べてください。</p>

4. 中上級日本語学習者の作文時における辞書使用

以下の表2に調査参加者の母語等の情報を、表3には、それぞれの調査参加者を選出した作文課題、辞書使用箇所の総数と使用辞書の情報をまとめている。(表2と表3の調査参加者の番号は互に対応する。)

表2 調査参加者

調査参加者	国籍	母語	性別	日本語学習歴	来日経験
1	ニュージーランド	英語	女	6年	初めて
2	イタリア	イタリア語	男	4年	初めて
3	イタリア	イタリア語	女	6年	2回目
4	シリア	アラビア語	男	5年	初めて
5	中国	中国語	女	5年	日本滞在5年目
6	中国	中国語	女	2年	初めて

表3 作文課題および辞書使用箇所と使用辞書

調査参加者	作文テーマ	字数	所要時間	辞書使用箇所	使用辞書
1	1年間外国で暮らすなら	580字	約55分	15箇所	スマートフォン：辞書アプリ ([JED]日英・英日辞典)
2	学校は必要か	640字	約70分	17箇所	電子辞書 (日伊・伊日辞典 国語辞典「デジタル大辞泉」)
3	学校は必要か	270字 ¹¹⁾	約40分	10箇所	電子辞書(日伊辞典)
4	友だちになるには	720字	約70分	12箇所	スマートフォン：辞書アプリ ([MLD]アラビア語－日本語)
5	友だちになるには	660字	約45分	8箇所	電子辞書(日中・中日辞典)
6	学校は必要か	680字	約30分	9箇所	電子辞書(日中・中日辞典)

今回の調査を通じて、中上級レベルの学習者の作文時における辞書使用に関し、以下の1)～4)のような点が注意すべき点として観察された。

1) 文法項目の使い方は辞書で確認しにくい

日本語教育でいわゆる「文型」として扱われる項目は、辞書において検索対象項目として記載されておらず、使い方に迷った場合に的確な用法を探すのが難しい場合がある。今回の調査では、譲歩およびヴォイスに関わる表現が、辞書を用いても十分に検索しきれていないと思われる例が観察された。

例えば、「その人が何をやっても、私は気に入らなかった」ということを言いたい場合に、「その人が何でもやったら、気に入らなかった」という表現をした例が見られた。母語(アラビア語)と日本語の対訳辞書で「何でも」にあたる表現を探したが、的確な例文がなく、確認できないまま使ったという。このような例は、譲歩表現が文法項目として難しいという点と、その使用法が辞書で確認しにくいということが重なって生じていると思われる。

また、イタリア語を母語とする学習者の作文において、「先生にいろいろ教えてもらった／教えられた」ということを言いたい文脈で、「先生に教えてくれたものは少なくない」という表現をしている例が観察された。事後インタビューで、執筆者は、「習う」を使った受け身表現を使用したいと思ったと述べているが、動

¹¹⁾ 熱心に作文に取り組んでくれたが、字数は目安の600字には達せず終了した。

詞部分にどのような表現を用いるか、「教える」と「習う」のような語彙的なヴォイスに関わる表現、「～てもらふ／くれる」などの受益の補助動詞、さらに使役や受け身が関わってくることによって混乱が生じ、伊日・日伊双方の対訳辞書を用いても、これを的確に確認することができなかつたようである。

辞書は、基本的に語彙レベルで項目を記載しているため、文法項目の使い方を文レベルで確認したい場合に、的確な用例が探しにくい。表現したい文脈と似通った例文が見つければ、その例文から正しい用法を推測することは可能となるが、辞書使用のスキル養成のみでは、このような問題には根本的な対応をすることが難しい点が残る¹²。

2) 複合的な表現は検索しにくい

1)と関連するが、複合的な表現の使い方も、辞書では確認しにくい。

例えば、「どちらでもいい」という表現を用いるのが的確な文脈において、この「どちらでも」という譲歩の表現が的確に探し出せなかつたために、その文の使用を避けたという例が観察された(英語母語話者)。このような「どちらでも」、あるいは「どちらかと言えば」「どちらにしても」などの複合的な表現は、例えば電子辞書の複数辞書検索を使うと、英和辞典など日本人の英語学習者を対象とした辞書において、その記載項目の日本語訳がヒットするが、日本語の例文はほとんど見られないものが多く、日本語学習者にとってはその使い方が確認できるようにはなっていない。

3) 的確な日本語訳を選ぶポイントは、例文確認と複数辞書検索である

母語あるいは英語などの第二言語から、対訳辞書を使って日本語の表現を探する場合、複数の日本語訳の中からの的確な表現を選ぶ際のポイントは、少なくとも2つあると考えられる。1つは、多くの日本語学習者が行っていることであるが、例文の確認である。どの訳語が適切か選択するためには、用例を見て考える必要がある。的確な例文が提示されていない場合は、判断が難しい。例えば、中国語を母語とする学習者が「(嫌なことやつらいことを)分かち合う」ということを述べたい文脈において、中国語の「分担」という語から考えたという「分担し合う」という表現を行っている例が観察された。執筆者は、日中・中日いずれの対訳辞書にも的確な例文がなかつたため、この文脈で日本語の「分担」を用いることが的確か否か、用法を確認できなかつたと述べている。

¹² 1つの解決策としては、電子辞書等において日本語学習者向けの辞書コンテンツの充実をはかり、文型辞典などの情報を搭載するように改善することなどが考えられる。

2つめのポイントは、1種類の辞書を引いて終わるのではなく、対応する別の対訳辞書を使って相互検索を行ったり、種類の異なる辞書を使って二段階検索を行ってみることである。例えば、英日対訳辞書で“visit”を調べると、「訪問する」「訪ねる」「訪れる」「参観する」「視察に行く」「見物に行く」など多くの対訳語が見つかる。それぞれの例文を見た上で、語の選択におよその見当をつけた後に、今度は逆に、日英対訳辞書で「訪問する」「訪ねる」などの項目を引き、掲載されている例文と英語訳を確認する。このことで、より多くの例文を見ることができ、また母語訳も参照しながら、自分が述べたい文脈において使用可能な語であるかを双方向の対訳から確認することができる。

また、例えばイタリア語の“situazione”（状況）“condizione”（条件）などから、対応する的確な日本語を探したいという場合、伊日辞典と国語辞典という異なる複数の辞書を使って二段階で確認している例が見られた。まず電子辞書の伊日辞典を使って、該当する語の日本語対訳語を探し、候補に挙がっている日本語訳の中から選択する語の見当をつける。その上で、同じ電子辞書に搭載されている国語辞典にジャンプし、その意味と例文を確認するという方法がとられていた。このように、種類の異なる辞典（母語と日本語との対訳辞書と、日本語による一言語辞書など）を使って、目指す語の意味と用法を二重に確認する方法は有効であると思われる。

4) 種類の異なる辞書には、その特徴を生かした使い方がある

学習者によっては、教室で日本語を学習している際には電子辞書を使うが、自宅で日本語の文章を書いたり、ウェブ上の記事を閲覧する際などにはオンライン辞書のサイトを使うなど、使用場面により辞書を使い分けていることがある。異なる辞書のそれぞれの特徴を生かせば、効果的な使い分けにつながる可能性がある。今回の調査では、スマートフォンの辞書アプリケーションを使って、電子辞書とは違った漢語の検索方法をとっている例が観察された。

スマートフォンなどの検索窓（検索したい文字列を入力するボックス）には、入力する文字列に後から文字を追加挿入できること、漢字変換は漢字1字の単位で行うことが可能で、音読み・訓読みのいずれからでもできることという特徴がある。この特徴を利用すれば、漢字熟語を正しく記憶していない場合や、その全体の読み方がわからない場合でも、構成要素の個々の漢字を1文字ずつ入力し、全体の文字列を作り出して、検索することができる。

例えば、有名な場所という意味を表す漢語が思い出せなかった際に、スマート

フォンの辞書アプリケーションを使って、目指す漢語を探し出したという例が観察された。その漢語に「有名」の「名」が含まれていたはずだという記憶から「名」を検索窓に入力し、次に「ところ」という訓読みから「所」という漢字を変換し、「名所」とつなげる。この文字列で検索した結果、その「名所」というのが目指す語だと確認できたというものである。

5. 辞書使用のスキルアップを目指したワークショップ

上記調査の結果も踏まえ、学習者の辞書使用のスキル養成を目指したタスク型ワークショップを企画立案し、第1回の実践を行った。今回は、まず辞書使用のプロセスの意識化と、複数辞書による検索をタスクのポイントとした。

5.1 概要

ワークショップの概要は以下の通りである。

- (1) 実施日：2014年10月22日(水)3時間目
- (2) 対象者：中上級レベルの日本語学習者29名¹³
- (3) 時間：90分間¹⁴
- (4) 目的：中上級レベルの日本語学習者が文章表現を行う際の効果的な辞書使用のスキルを養成する
- (5) ワークショップにおける学習者の到達目標：
 - a. 自らの辞書使用について自覚的になる
 - b. 「複数辞書検索」、「対訳辞書の相互検索」、「例文から考える」等、目指す表現を見つけ出すための辞書の使い方の工夫について知る

東京外国語大学「全学日本語プログラム」¹⁵中上級レベル(レベルコード:500)¹⁶

¹³ 学習者の国・地域は、中国、韓国、香港、タイ、インドネシア、ウズベキスタン、カザフスタン、ロシア、ポーランド、ブルガリア、セルビア、スロベニア、シリア、エジプト、英国、フランス、イタリア、オーストラリアである。計30名のクラスだが、当日1名欠席であった。

¹⁴ 当初、1回目のワークショップは50分程度を計画していたが、辞書検索のプロセスなどをクラス内でシェアする時間を十分にとった上で次の課題に進むように計画を練り直し、全体で90分間のセッションとした。

¹⁵ 東京外国語大学「全学日本語プログラム」(JLPTUFS: Japanese Language Program, Tokyo University of Foreign Studies)は、交流協定校からの交換留学生、日本語・日本文化研修留学生、教員研修留学生、国費・私費の研究生、予備教育課程の国費研究留学生など、非正規の留学生を対象とした全学的な日本語プログラムである。初級から超級まで8段階のレベルがあり、2014年度秋学期現在計42の科目が開講され、1週間の延べ開講コマ数(1コマ=90分の授業)は計84となっている。

の文章表現クラスにて、2014年度秋学期開始後4回目の授業でクラス授業の一環として実施した。当日は、この授業の担当者（高野愛子）がワークショップを主導し、鈴木智美が、「全学日本語プログラム」運営委員会の許可を得て、サポート役としてクラスに入り、実施補助および観察・記録を担当した。

5.2 事前準備

ワークショップの内容原案を鈴木が考案し、高野・鈴木両名で検討した。具体的なタスクシート、および辞書使用の過程をメモするためのプロセスシートは高野が作成し、鈴木・高野両名で検討した。予習シート、振り返りシート、当日提示するスライド資料は鈴木が作成し、同じく両名で検討した。

また、各学習者が文章を書く時にふだんどのような辞書を使っているかを予習シートをもとに確認し、母語や使用辞書の異なるメンバーが組み合わせるように、授業担当者の高野がグループ分けをしておいた¹⁷。当日は、文章を書く時にふだん使っている辞書をクラスに持って来るように指示しておいた。

5.3 タスクの流れと内容

以下、表4にワークショップで実施したタスクをまとめて示す。（ワークショップはタスク1～3の順序で行われた。）

表4 辞書使用のスキルアップを目指したワークショップ（第1回実施タスク）

●辞書を上手に使いこなそう：スキルアップワークショップ 中上級文章表現クラス	
■タスク1：辞書の使い方について話そう・聞こう	計5分
辞書使用についての情報交換（グループワーク） 5分	
★目標：自分の辞書の使い方を振り返る ほかの人の辞書の使い方を知る	
予習シートに基づき、お互いの辞書使用状況について情報交換	
・文章を書く時、どのような辞書を、どのように利用しているか	
・辞書を使用していて、不便だと思うこと、困ることはないか	
・辞書を使用する際に、気をつけていることや工夫していることはあるか	

¹⁶ 上記「全学日本語プログラム」のレベル設定にしたがえば、中上級（500）レベルとは、終了時に日本語能力試験「N2」合格が目安となるレベルである。

¹⁷ 3名ずつ10グループにしたが、当日欠席者が1名いたため、1つのグループは2名となった。

■タスク2：辞書を使って表現を直してみよう：基礎編		計40分
個人作業	20分	
グループでシェア	10分	
全体でシェア	10分	
★目標：プロセス・メモを記入しながら、辞書を使う過程を意識化する		
<ul style="list-style-type: none"> ・修正が望ましい箇所に下線を付した課題： 辞書を使用しながらよりよい表現に直す。辞書使用のプロセスを各自メモする ・どんな辞書をどのように使って、代わりに、どのようなよい表現を見つけたか、報告する 		
■タスク3：辞書を使ってよい表現を考えよう：応用編		計40分
個人作業	20分	
全体でシェア	20分	
★目標：その表現を選んだ根拠を考える ほかの調べ方もあることを知る		
<ul style="list-style-type: none"> ・空欄に適切な語句を埋め込む課題： 辞書を使用しながら、よい表現を探す。辞書使用のプロセスを各自メモする ・どんな辞書をどのように使って、どのような表現を見つけたか、なぜその表現を選んだか、報告する 		
■まとめ：振り返りシート記入		計5分

タスク1は、ウォーミングアップも兼ね、辞書使用についての気づきを促すことを目的としている。文章を書く時、どのような辞書をどのように利用しているか、予習シートに基づき、お互いの辞書使用について情報交換を行う。

タスク2は、基礎編のタスクで、修正が望ましい日本語の表現に下線を付した短文課題である。辞書を使う過程を意識化することを目標とし、自身の辞書使用のプロセスを「プロセス・メモ」に記入しながら考えていく。プロセス・メモには、まず最初に調べた語・表現を記入し、使った辞書の種類（あるいは辞書の名称）とともに、そこにどのような説明や例文があったか、語句あるいは1文の単位で簡単に記すようにしている。別の種類の辞書や、別の語句をさらに調べた場合には、矢印で検索の順序を示し、同様のメモを記す。最終的に選んだ語・表現には印をつけることとした。

タスク3は、応用編のタスクで、短文あるいは一段落程度の文章の空欄に、適切な語句を埋め込む課題である。写真を見て、様子を描写するように求めた課題も入っている。応用編では、なぜその語・表現を選んだのか、根拠となる情報が

辞書のどこにあったのかを意識化すること、および適切な語・表現を見つけ出すためには異なる複数の検索方法があり得ることを知るということを目指している。プロセス・メモの記入も、プロセスの意識化そのものが目標というより、最終的に印をつけた語・表現の選択の根拠がどこにあるかを意識化することを考えている¹⁸。また、適切な語・表現が複数ある可能性もあり、その検索方法や手順も1つとは限らないことから、グループ内あるいはクラス内で結果をシェアすることも重要な活動となる。

5.4 タスクにおける辞書検索の実際

5.4.1 使用辞書

学習者が日本語で文章を書く時に「よく使う」あるいは「時々使う」と回答した辞書は、以下の通りである（複数回答可）。ワークショップ当日は、学習者がそれぞれ電子辞書、スマートフォン、ノートパソコンなどを持参した。

表5 ワークショップ参加学習者がふだん使用する辞書（予習シート回答）

辞書のタイプ	スマートフォンやPCの辞書アプリケーション	25名		
	ウェブ上でアクセスできるオンライン辞書	20名		
	電子辞書	14名		
	その他：書籍タイプの辞書	1名		
辞書の種類	国語辞典	12名	英和辞典	12名
	和英辞典	12名	露和・和露	2名
	伊日・日伊	2名	韓日・日韓	2名
	アラビア語－日本語・日本語－アラビア語	2名		
	セルビア語－日本語	1名	仏和辞典	1名
	中日・日中	1名	タイ日・日タイ	1名
	新編現代外来語辞典	1名	日本語文型辞典	1名

¹⁸ ある学習者からは、「直感」で語・表現を選ぶから、根拠・理由は説明できないというコメントもあった。試行錯誤しつつ表現を探すことが比較的多く見られる中級～中上級レベルにおいては、辞書使用のプロセスや語・表現を選択した際の決め手などを意識化してみる活動には意味があると考えられる。が、より上級レベルに近づけば、辞書使用の過程をよりシンプルにとらえる方向を考えていくことも必要かもしれない。

5.4.2 タスク2: 基礎編

基礎編のタスクは、下線を付した日本語の表現をより適切な表現に修正する短文課題である¹⁹。2種類の文に計4箇所の問題を組み込み、うち2箇所の問題を扱った。以下はその1つの例である。

タスク2: 下線部分の日本語を適切な表現に直す(実際は漢字には総ルビ付き)

例) 病院でくわしい検査をしたところ、まじめな病気であることがわかった。

学習者のプロセス・メモの記述を見ると、辞書で最初に調べた語、および検索過程を経て最終的に選んだ語は、以下の通りである(数値なしは各1名)。

表6 タスク2:「まじめな」という表現をどのように修正したか

最初に調べた語	結果として選んだ語
まじめな 20名 →	重い 8名 深刻な 6名 重大な 大病 真摯 大きい・重い (選択なし) 2名
病気 6名 →	重い 4名 大きな・重い 大病・重症・難症
重病 →	重い
大変な →	重い
タイ語で「まじめ」 →	深刻な

プロセス・メモの書き方にまだ慣れていないこともあり、最終的に選んだ語が「大きな・重い」「大病・重症・難症」と並記されている例や、最終的に選んだ語に印の付けられていない例も見られた。

学習者のプロセス・メモの一例を、以下 a)～c) に示す。

a) ロシア語母語話者の例

まず、和英辞典で「まじめな」を調べ、「まじめな」が修飾する典型的な名詞として「話、顔、態度」などがあったことがメモされている。次に和英・和露辞典で「病気」を引き、「大きい・重い」という修飾語句を見出している。念を入れて露和辞典を引くと「重患」という対訳語が見つかり、国語辞典でその意味を確認している。最終的に「大きい・重い」を選んでいることが観察される。

¹⁹ 石黒・筒井(2009)の第11課「辞書の危険性」に、日本語の文章を読み、下線の付された表現を辞書やインターネットを使って適切な表現に直すという練習問題があり、基礎編の問題作成にあたっては、その形式も参考にしている。

まじめ	★和英「まじめ」→「話、顔、態度」
	★和英・和露「病氣」-「大きい・重い」
	★露和「серьезный」 例「серьезная болезнь」→ ^{じゆうかん} 重患
	★国語「重患」→意味「重い病氣・重病」 <small>じゆうかん じゆうびん umeru, apuzhi, bolezny</small>

図3 タスク2検索プロセス・メモの例：ロシア語母語話者

b) セルビア語母語話者の例

まず、「まじめ」を国語辞典で調べたが、特に結果は得られなかったようで、和英辞典(辞書アプリ：Aedict Japanese Dictionary)で「病氣」を検索し、「彼の病氣は深刻だ」という例文を認めたようである。国語辞典にあたって「深刻な」の意味を確認し、これを選択したという流れが観察される。

まじめ	★E: まじめ ★広辞苑 → 病氣 ★ AEDICT 例: 彼の病氣は深刻
	⇒ 深刻 ★広辞苑 → <u>深刻な</u>

図4 タスク2検索プロセス・メモの例：セルビア語母語話者

c) ポーランド語母語話者の例

まず、「病氣」を和英辞典で調べ、「大きな病氣」「重い病氣にかかる」という例文を確認している。既知の「深刻な」という語が「病氣」と共起できるかを確認したかったようだが、辞書からは確認できなかったようである。結果、「大きな／重い病氣」という表現を選択していることがわかる。

病氣	★和英: 例文の重患	★大患の病氣 = serious disease
		★重い病氣(にかかる) = get a serious disease
	★知っていた言葉は「)重患, わけは「病氣)合)か? 調べたよ	
	★結果: 合)したい。(合)て思)たよ...	
	★合)いた表現: ① 大患/重い病氣	

図5 タスク2検索プロセス・メモの例：ポーランド語母語話者

タスク2は、与えられた日本語表現を修正するというタスクであることから、

ほとんどの学習者が、日本語の表現（「まじめ」「病気」）から検索を始めている。

5.4.3 タスク3：応用編

応用編のタスクは、短文あるいは一段落程度の文章の空欄に、適切な語句を埋め込む課題である。写真を見て様子を描写するタイプも含め、2種類の文章に計5箇所の問題を組み込んだ²⁰。時間内でできるところまで取り組んでもらい、うち以下の1箇所の問題について結果をシェアした。

タスク3：下線部分に適切な日本語の表現を入れる（実際は漢字には総ルビ付き）

例)「本当の友だち」とは、喜びや楽しいことだけではなく、嫌なことやつらいことも、_____ことができる人だと思う。

学習者のプロセス・メモの記述を見ると、辞書で最初に調べた語、および検索過程を経て最終的に選んだ語は、以下の通りである（数値なしは各1名）。

表7 タスク3：適切な表現をどのように見つけたか

	最初に調べた語	結果として選んだ語
日本語から	友達 2名 相談する 共にする 2名 本当 慰める	→ 共にする 2名 → 共にする → 問題に対処する・共にする 2名 → なぐさめる → 慰める
英語から	英語 “share” 英語 “to survive” “to spend” 英語 “make better” “remove” 英語 “everything” など	→ 分かち合う → 過ごす → とりのぞく → さまざま、一緒に
母語から	中国語「分享」(分かち合う) 2名 韓国語 “나눈다” (分ける) 2名 フランス語で「本当の友達」 アラビア語で “to consider” ロシア語で “share” ロシア語で「同情」 タイ語で「分かち合う」	→ 分かち合う 2名 → 分かち合う 2名 → 心を許す → 思いやる → 共にする → 同情する → 分かれ合う

²⁰ タスク3の課題のほうが、日本語学習者が実際に文章を作成する時の状況に近い。タスク2のほうは、例えば自身の文章表現について不自然な箇所を指摘された場合に、どのようにそれを直していくか、辞書を参考にしながら考えるという状況に近いと考えられる。

この問題では、嫌なことやつらいことを「分かち合う」「共にする」などの表現が可能であるが、日本語から調べ始めた場合には「共にする」、英語あるいは母語から調べ始めた場合には「分かち合う」を選択することが多いという結果になっている。学習者のプロセス・メモの一例を、以下 d) ～ f) に示す。

d) 中国語母語話者の例

中日辞典で中国語の「分享」(分かち合う)から検索を始め、「喜びを分かち合う」という例文を認めている。さらに国語辞典で「分かち合う」の意味を確認し、これに確定している。

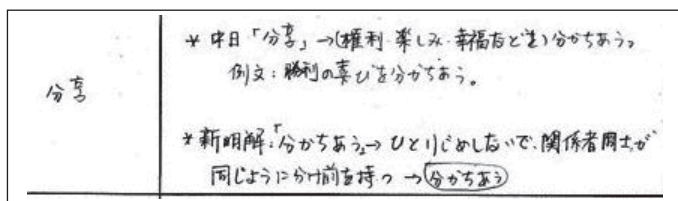


図6 タスク3検索プロセス・メモの例：中国語母語話者

e) ロシア語母語話者の例

露和辞典で英語の“share”に当たるロシア語を検索すると、「分かち合う」「分け合う」「お察しする」「共にする」など、複数の対訳語が見つかっている。「苦楽を共にする」という例文から「共にする」を選んでいることがわかる。

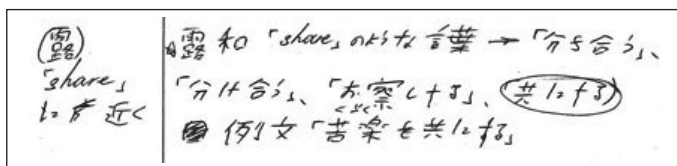


図7 タスク3検索プロセス・メモの例：ロシア語母語話者

f) イタリア語母語話者の例

和伊辞典で「相談」という日本語から検索を始めている。決定的な情報が得られなかったようで、次に和英辞典で英語の“share”に当たるイタリア語を調べ、「(～を)共にする」という表現を見つけている。この「共にする」を和英辞典で確認した結果、「喜びだけでなく、辛いことも共にする」という例文があり、確定し

たという流れが観察される。

相談 ⑤ (英) 共にする	*和伊 → 「相談する」 例文 → 「父に相談の上で・・・」 → 女兼ねてや辛くてたへに死んで相談する ⇒ *伊和 → 「condividere」(英語: share) [和英] 例文: share each other's joy and sorrows → 喜ばなければなく、辛くても共にする
------------------	---

図8 タスク3検索プロセス・メモの例：イタリア語母語話者

タスク3は、日本語学習者が実際に文章を作成する時の状況に近い。このような状況では、タスク2とは異なり、英語²¹あるいは学習者の母語から検索を始める例が多く見られた。使用する辞書は、英和、露和、伊和、韓日、中日など、主として学習者の母語と日本語との対訳辞書である。複数の辞書を使用する場合でも、英和辞典や中日辞典など、母語等から日本語への対訳辞書から検索を始め、次に国語辞典や、日本語から母語等への対訳辞書で確認するという手順となっていることが観察された。

5.5 ワークショップの評価

ワークショップの最後に記入した振り返りシートでは、各質問項目に対する回答状況は以下のようにになっている。

表8 振り返りシートにおける質問への回答状況

質問項目	はい (人)	いいえ (人)	どちらとも 言えない (人)
1. 自分がふだんどのように辞書を使っているか、わかった。	28	1	0
2. ほかの人がどのように辞書を使っているか、知ることができた。	26	1	2
3. 似た意味の言葉があった時に、どの言葉を使えばいいか、辞書を使って調べる時のポイントがわかった。	25	0	4

²¹ 学習者の母語ではないが、インドネシア、ブルガリア、ポーランド、スロベニアの学習者に、英和辞典を使用して英語から検索を始めている例が見られた。

4. 自分の母語や英語などから日本語を調べた時、いくつかの言葉が出てきたら、その中から一番いいものを選ぶ時のポイントがわかった。	25	1	3
--	----	---	---

質問の1と2には、ほとんどの人が「はい」と回答している²²が、「いいえ」および「どちらとも言えない」という回答も若干ある。これは、ワークショップの第一の目標である、ほかの人の辞書使用についても情報を得ながら、自らの辞書使用を意識的にとらえることができたかという問いである。

質問の3と4は、いずれもポイントとなるのは辞書に掲載されている例文をよく見ること、および複数の辞書を使って検索してみること（双方向の対訳辞書を使って相互に調べ直すこと、および対訳辞書と日本語辞書など種類の異なる辞書を使って二段階の検索を行うこと）の2点である。「どちらとも言えない」という回答がある点は、今後に向けての反省点となる。

6. まとめと今後の課題

本稿では、まず6名の日本語学習者の協力を得て作文課題を行ってもらい、その際の辞書使用の状況について、モニター録画および事後インタビューを通じて調査した結果、観察された注意すべき点について記述した。その結果も踏まえ、辞書使用のスキルアップを目指したワークショップ試案を作成し、第1回の実践内容について報告した。

今後の課題としては、まず、辞書使用の詳細データの収集においては、作文執筆後のインタビューの質を高めるため、辞書検索の過程をメモするプロセスシートの導入を検討すべきかもしれない。一方、ワークショップ実施時には、プロセス・メモの記入に必要以上に時間をとられないよう、フォーマットの工夫や指示のしかたについて、改善を行うことが必要かもしれない。

ワークショップにおいては、辞書使用のポイントとなる点がうまく導き出せるように、タスクにおける個々の辞書使用課題についてさらに検討を重ね、改善をはかっていきたい。また、学習者の母語や使用辞書の種類別の観点なども含め、

²² 授業時間内に行った活動のため、学生が自身のパフォーマンスについて「わかった」「できた」という自己評価に傾くことは予想できる。ワークショップの進め方や、教師の説明のしかた等について直接フィードバックを得られるように、質問項目については改良を加えたい。

注意すべきポイントを考えながら、タスクについては複数のバージョンを作成することなども検討したい。

ワークショップの実施方法については、例えば、ワークショップを2回の日程に分けて行うことも考えられる。1回目は辞書使用のプロセスを意識化するタスクにとどめ、それを踏まえて、プロセス・メモをとりながら実際に辞書を使って調べてみる課題については宿題とし、その結果を2回目のセッションで教室に持ち寄り、互いにシェアすることに重点を置くという方法である。日本語表現を直すタスクよりも、状況に応じて言いたい日本語を探すタスクのほうが、日本語学習者が実際に文章表現課題において直面する状況に近いため、どちらのタスクに重点を置くかという点も含め、検討したい。

本研究は、日本語教育のコース・カリキュラムの中で、学習者の辞書使用のスキル養成をはかることを考えていこうとするものである。一方、日本語学習者の使用に適する辞書については、その利便性をはかることが遅れている状況と言わざるを得ない。これまで多くの辞書や日本語の文法等の解説書・ワークブックなどが紙媒体によって作成されてきたが、日本語学習者が文章執筆時にそれらの書籍を1冊1冊手に取り、文章作成に役立てるといような状況は考えにくい。電子辞書のオプションコンテンツを日本語学習者向けに整えることや、オンラインで検索できる辞書の質を高めること、あるいは質のよい辞書がオンラインで検索できるよう公開の方策を探るなど、課題は多く残されていると言える。

(執筆分担：表5～8の集計を高野、図3～8の学習者のプロセス・メモの解説は高野執筆を鈴木が加筆修正、ワークショップタスク2と3の検索開始言語の傾向の違いについては高野執筆案を鈴木が再構成の上、修正執筆した。その他は鈴木が執筆し、最終編集を行った。)

引用文献

- 石黒 圭・筒井千絵 (2009) 『留学生のためのここが大切文章表現のルール』スリーエーネットワーク
- 鈴木智美 (2010) 「辞書の使用が引き起こす学習者の不自然な表現—『JLPTUFS 作文コーパス』の作文から見えてくること—」『2010 世界日本語教育大会 (ICJLE) 予稿集』(DVD 版) 1436-0-1436-9
- 鈴木智美 (2012a) 「留学生の辞書使用についての実態調査—東京外国語大学で学ぶ留学生へのアンケート調査の結果と分析—」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』第 38 号 pp.1-16
- 鈴木智美 (2012b) 『留学生の文章産出時における辞書使用の実態調査—言いたい日本語はどう見つけるか—』平成 22 年度 (2010 年度) ~平成 23 年度 (2011 年度) 科学研究費補助金挑戦的萌芽研究 研究成果報告書 (課題番号: 22652047、研究代表者: 鈴木智美) 東京外国語大学留学生日本語教育センター 鈴木智美 (編著)
- 鈴木智美 (2013) 「日本語学習者のための辞書使用のスキル養成のポイント—留学生の辞書使用に関するアンケート調査自由記述欄の SCAT による質的分析を通して—」『東京外国語大学論集』第 86 号 pp.131-158
- 鈴木智美 (2014) 「中上級日本語学習者の作文過程における辞書使用—辞書使用の詳細を可視化するデータベース作成に向けて—」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』第 40 号 pp.15-33
- 松田浩志・亀田美保・長田龍典 (2003) 『テーマ別中級から学ぶ日本語 (改訂版)』研究社

Dictionary Use by Pre-Advanced Japanese Learners: Investigation of How Dictionaries Are Used for Written Compositions, and Report on Workshop for Developing Skills for Dictionary Use

SUZUKI Tomomi, TAKANO Aiko

The purpose of this paper is to investigate pre-advanced Japanese language learners' dictionary use during composition writing, and to report on the workshop aimed to develop the dictionary use by learners, which was conducted in a pre-advanced level composition class.

Through this investigation, the following four points were found that should be paid attention to. Firstly, the grammatical usage is sometimes hard to check up in dictionaries. Secondly, some compound expressions can also be difficult to check up in dictionaries. Thirdly, there are two important approaches in order to select the appropriate Japanese expressions from dictionaries. One is to check the example sentences to confirm the usages in contexts, and the other is to search through different kinds of dictionaries such as English-Japanese and Japanese-English dictionaries, or bilingual and monolingual dictionaries to compare the usages. And fourthly, different types of dictionaries such as electronic dictionaries or online dictionaries have their own features and advantages which can be beneficial when used effectively.

In the workshop we focused on achieving two goals by performing three types of tasks concerning dictionary use. One goal was to build learners' self-awareness about dictionary use, and the other was to share the effective ways to find the appropriate expressions as mentioned above.